

1 研究の概要

(1) 研究主題

自己実現につながる学級活動(2)の指導過程の工夫

－「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を通して－

(2) 主題設定の趣旨

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申において、「内閣府の調査によれば、子供たちの 9 割以上が学校を楽しんでいるという結果が出ており、これは各学校において、現行学習指導要領等に基づく真摯な取組が重ねられてきたことの成果であると考えられます。（中略）その一方で、学ぶことの楽しさや意義が実感できているかどうか、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識を持てているかどうかという点では、肯定的な回答が国際的に見て相対的に低い、という指摘がある」⁽¹⁾と述べられています。そこで、自分をよりよくしようと努力することが、自分のためにも学級のためにもなると実感できるように、子供たちが生活する社会である「学級」の中で、生活上の課題を共有し、集団の中で話し合い、一人一人が努力目標を決定し実践する経験を積み重ねることが重要になると考えました。また、新学習指導要領では特別活動において、幼児教育や他教科との関係性も意識しつつ、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という 3 つの視点を手掛かりとしながら、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱に沿って、目標及び内容を整理するとともに、育成すべき資質・能力の系統性を考慮し、特別活動で育成する資質・能力が明確化されました。その中で、学級活動では(1)、(2)に加え(3)として「一人一人のキャリア形成と自己実現」が設けられ、「学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに希望や目標をもち、その実現に向けて日常生活をよりよくしようとする事」⁽²⁾が挙げられています。ここで、自己実現に必要な力とは、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力であり、これは集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる問題を考察する中で育まれるものだと考えます。そこで、本研究では、集団の中で自分を見つめ、目標を自己決定し、よりよい自分を目指し目標達成のために取り組む姿を自己実現に向かう姿だと捉え、研究を進めることにしました。その自己実現に向かう姿を考えた際、白松賢は「そもそも自己を変容させることは、強制されることでは生じにくい。自己を分析し、よりよくしようとする『自律的』な資質能力を養うための指導の視点として『がんばればできること』と『がんばってもできないこと』を切り分けるバウンダリーワーク（境界線引き）があり、児童生徒の困り感を解消する上で、非常に有益である」⁽³⁾と述べています。

そこで、本研究では、学級活動(2)における授業展開の基本形である「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」を意識し、この「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を「決める」の中で活用し、自分に合った目標設定のための手立てとします。児童は、集団討議の後に「決める」場面において仮目標を立て、その後、自分にとって「今できていること」「もう少し頑張ればできること」「かなり頑張ればできること」を考えてワークシートに整理します。この「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を行った後に、友達と交流させ、友達の意見を聞いた上で自己決定をさせます。これにより、「今できていること」の承認と「なりたい自分」に自ら向かう道筋を作ることができ、自己評価と他者評価がしやすくなり、自己実現につながると考えます。検証授業では、小学校 5 年生の児童を対象に行い、「自分に合った目標を立てることができたか」と「目標達成に向けた実践を基に、自己目標の振り返りができたか」の 2 点を検証の視点とし、「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動の有効性を検証します。

（３）研究の目標

学級活動(2)において、目標を自己決定し、よりよい自分を目指し目標達成のために取り組む児童を育成するための「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動による手立ての工夫を探る。

（４）研究の仮説

小学校 5 年生の特別活動の授業：学級活動(2)において、「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動による目標設定における手立ての工夫を行えば、よりよい自分を目指し目標達成のために取り組む児童を育成することができるであろう。

（５）研究の方法

- ア 学級活動(2)の指導過程に関する理論研究と先行研究の調査
- イ 5 年生の児童を対象とした「目標」の捉え方に関する質問紙調査
- ウ 5 年生における授業実践と手立ての有効性の検証

（６）研究の内容

- ア 文献調査や先行研究調査を通して、学級活動(2)における「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を自己分析と目標設定における交流活動、実践における認め合う活動の工夫を探ります。
- イ 対象学校 5 年生の児童に対して、「目標」に対する取り組み方や学級・自分の実態の理解と改善すべき課題に対する意識について質問紙調査を実施し、児童の実態を把握します。
- ウ 授業において目標の自己決定を行う際に解決方法を、「今できていること」「もう少し頑張ればできること」「かなり頑張ればできること」を切り分ける「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を行い、自己分析を基に友達と交流活動をして自己目標を決定させる活動を通してその有効性を検証します。

《引用文献》

- (1) 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 平成 28 年 12 月 p. 6
- (2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説特別活動編』 平成 29 年 6 月 第 3 章第 1 節 2
- (3) 白松 賢 『学級経営の教科書』 平成 29 年 3 月 東洋館出版社 p. 141、143